

天草マグロ 成育順調

近畿大水産研究所（和歌山県白浜町）と天草市楠浦町の水産加工ブリミー（濱忠臣社長）が、同市牛深沖でクロマグロの完全養殖に着手して丸一年。世界的に天然マグロの漁獲規制が加速する中、続々と稚魚を投入するなど、人工ふ化マグロの量産化に向けた初の産学連携が着実に進んでいる。

（原大祐）

八日、牛深港沖約一キロ。小雨の中、いけすきに横付けした大型船の船腹にあるハッチが開き、体長三十センチほどの完全養殖マグロの稚

魚が勢いよく泳ぎ出す。立ち会った近大水産研の担当者は「昨年入ったマグロの成育も順調。天草で完全養殖マグロの産業化が成功すれば、世界へPRできると力を込めた。」

生存率70%

ブリミーはクロマグロの完全養殖に成功し、一月末時点で約千五百匹が生き残り、生存率七割を確保している。魚体も体長一メートル超、重さ二十キロ近くに成長。〇九年末にも初出荷を迎えられそうだ。



牛深沖で「養殖」着手1年…来冬出荷も

産学連携 量産化へ

濱隆博部長は「当初計画の生存率六割前後を上回る出来。独自のマグロ養殖技術も固まりつつある。」

今年に入り、天然と完全養殖の稚魚各三千匹を追加投入。昨年十月投入の天然の稚魚約千匹を含むと、計約八千匹のマグロが天草の海で育てられている。

同社は事業拡大に合わせ地元中心に四人を新規雇用。マグロ出荷を控え、牛深地域に工場建設も計画しており、新たに二十人前後の雇用を見込む。安田公寛市長は「沈滞する天草経済の中で（マグロ事業は）一条の光」と期待する。

資源の枯渇

〇六年に天然マグロ

牛深沖に並ぶマグロの養殖いけす。右上は牛深町中心部。天草市（小山真史）

の漁獲可能量を約二割減とする規制を示した資源管理機構「大西洋まぐろ類保存国際委員会」は十一月、さらに〇九―一〇年に各二割減らす方針で合意。乱獲での資源枯渇を危惧した措置で、マグロの消費大国日本への影響は避けられない。

こうした中、近大水産研は完全養殖マグロの生産拡大を打ち出している。十一月、十二月にはブリミーに続き愛媛、大分の養殖業者にも完全養殖の稚魚計約二千匹を提供。来年は出荷稚魚を二万匹に増加、近い将来に供給量を十万匹へ増やし、天然稚魚の乱獲抑制につなげたい考えだ。

近大水産養殖種苗センターの岡田貴彦大島事業場長代理は「米国では、資源を保護する完全養殖マグロとして消費者の人氣も絶大。天草での成功をステップに普及率を高めた」と話している。